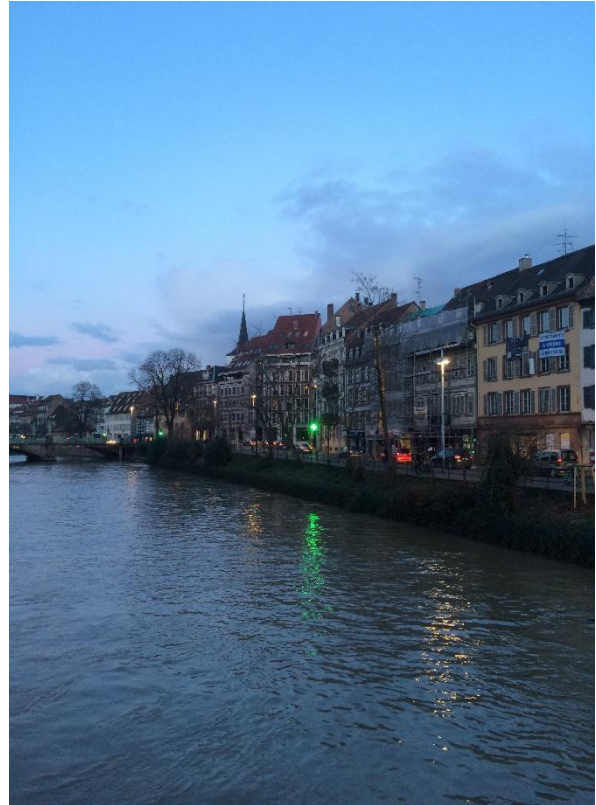


「ストラスブールで学んだ、獲得した三つのこと」

文学部 美学美術史学科 秋山暁

ストラスブールはフランスの北東、国境付近のアルザス地方に位置する都市である。今でこそフランスであるが、過去には独仏両国間を揺れ動いてきた歴史を持つ。そのため文化的に見てもドイツと近く、滞在前「フランスといえばパリ」と思い込んでいた私に異なる価値観を持たせることにもなった。街の中心に聳える大聖堂、プティットフランスの美しい真壁造りの家並み、そして美味しい伝統料理とワインといった素晴らしい環境の中、二週間という時間はあっという間に過ぎ去ってしまった。ここでは研修を通じて私が学び考えたことに関し、三点（多民族・外交・芸術）に絞って述べようと思う。

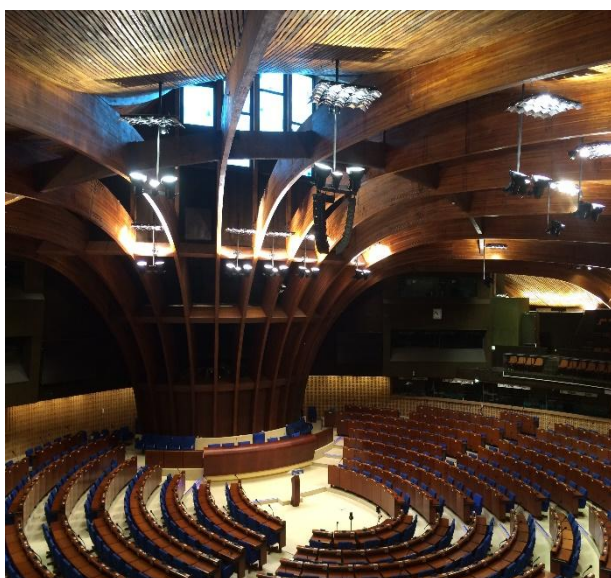
第一に印象に残っているのは、やはりフランスという国の多民族性であろう。大学での交流会を期に知り合った学生達の中には、ニューカレドニアやマダガスカルなどフランス



「薄暮のイル河畔」

語圏であるものの遥か遠くの国出身の者もあり、その背景も様々であった。私が親しくなった女学生はマダガスカルで生まれ幼い頃渡仏し、母語でないフランス語を努力して勉強した結果、現在ではネイティブ同様に話すことが可能になったのだという。よって会話の中で語学習得に関して学ぶ部分も多く、貴重な時間を過ごすことが出来たが、同時に彼女達が抱える問題というものも再認した。十二年という歳月によって彼女の母語能力は衰え、両親が喋る内容は理解できるものの、自らは意思疎通の手段としての使用が難しくなってしまったのである。言語とは文化を伝承し、世界と自己とを関連付けるものとして非常に重要な意味を持つ。その断絶はアイデンティティーの揺らぎにも繋がってくるかもしれない。だが私が興味深く感じたのは、そうした状況であっても、彼女は音楽という非言語ツールを通じて自己のルーツとの繋がりを保とうとしていた事だった。普段はあまり意識しないが、人間の帰属欲求の強さを感じたとも言えよう。そんなことは当たり前だと思う人もいるとは思う。人は共有しうる基盤を必然的に求めるものであると。だが、こうした帰属欲求というものは今日重要な問題に関わり得ると私は考える。我々が渡仏したのは三月、ISIS へ各国の若者たちが依然向かっていたし、その二ヶ月ほど前の一月七日シャルリー・エブド事件は起こった。幾らストラスブールがパリから離れていようと、参加者皆多少の

不安を抱いて研修に臨んだであろうし、少なくとも自分は確実に念頭にあったのである。この事件の背景を探れば、既存の排外主義やイスラムコミュニティ内での出身や階層による分裂（森 千香子 外交 vol.14 時事通信）などによって自己が存在する社会から疎外され、孤立した人々の姿が現れるであろう。彼等は摩擦を感じつつ本来の基盤を探すも一度切れたものは容易には戻らない。そうして追い詰められた後に見出すのが、確実な所属と虚構的、幻想的「イスラム」という帰属欲求を満たす原理主義集団なのではなかろうか。今回の事件は非常に同時代性を持ち我々に衝撃を与えたわけではあるが、帰属欲求を含む問題において移民問題が絶対項ではなくより多様な様相を呈すると私は推察する。地下鉄サリン事件に見られたように、同じ文化基盤をもつ社会に属したとしても集団からの隔絶を体験する現代社会に我々は生きているのである。ただ、情報伝達技術の発展に伴い、嘗てない規模で被害が起こり得るということが過去と異なる点であるのだ。こうしてみると、帰属欲求の負の面ばかりが目立つが、確実に良い面も持っている。人間の文化を基盤とした適応能力というものは実際驚異的なものだ。しかし、それは丁度私が派遣団の仲間がいたからこそ滞在を満喫したように、あくまで文化集団として発揮されるとき強固なのであって孤立すれば脆い。そうして疎外された場面で、利用されてしまう危険を孕むものが帰属欲求というものであると私は結論づける。



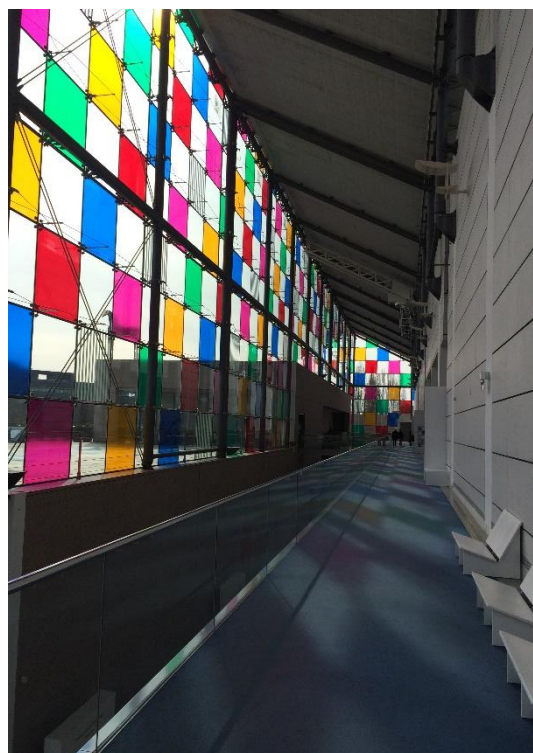
「欧州議会」

第二に、人権問題などを扱いヨーロッパにおける国連と言ってもよい欧州議会見学は、「歴史上犬猿の仲の独仏が、対立の象徴であるからこそストラスブールを未来に向けた宥和の地に選んだ。」という発想を日本の外交問題に転換できないかという考えを得る契機となった。勿論歴史的経緯が異なるので一概に言えないが、尖閣・竹島共に不毛な対立の火種であり、あまり生産的な議論が国家間でなされていない現在の状況を変化させる為には、新たな価値付けを行うことも手であろう。両島は離島であるがためにストラスブールのような外交機関を設置することは出来まいが、共同の海洋

研究施設などより文化的な結びつきを強める歩み寄りがあっていいように思う。見学の中で解説の方が述べられた言葉に「友人同士がすぐに口論に至らないのは、互いの内面を理解しているから。国家間も同じであり、それぞれの文化を学ぶことで無用な衝突は避けられる。」というものがあつたが、我々はそのための努力をしているのであろうか。最近では書店に嫌中・韓コーナーが置かれるなど、ナショナリズムを逆に高揚させる動きが主流に

なりつつある。誰もが本来的に多少のナショナリズムを持ち合わせているが、それと如何に向き合うかが大切なのである。多様な立場が存在することは結構であるが、まずなぜ自分がそう考えるのか世相に流されず問いかけてみる姿勢が必要であろう。

最後に自己の専攻である美術に関して、日本と欧州では美術館の位置づけそのものが若干異なるということに気が付いた。日本において美術館というと、何らかの企画展が開かれた時に見に行くという見世物的要素が一般には強い。そのため、人気の印象派などと比較すると新人作家や現代美術・アバンギャルドを広い年代の人々が鑑賞する機会というのはあまり多いとは言えないのである。またこうした状況では美術品の収集かつ保存という美術館の重要な側面が見落とされ、単なる展示場程度の認識しか得られない。これと対照的にストラスブールで私が訪れた各美術館では、建築自体、常設展を中心に考えられている場所が多く企画展示はその存在の上に成るという状況であった。よって、より日常的に



「ストラスブール現代美術館」

美術館に赴き、一つの作品を自己の変化と合わせて鑑賞する環境が整っているのである。また学生が授業の一環として見学を行ったり、幼児を伴った親子向けのワークショップが催されていたりと早期から芸術に触れ考え意見を述べる訓練が盛んになされ、議論し想像を膨らませる教育の場としても美術館が存在していた。日本でもこうしたワークショップはあるが、学校で訪れるという機会にあまり恵まれていないのが残念である。勿論、様々な形態の展示場は存在すべきであるし、個人収集と異なり公立は冒険的な作品購入は許されない。しかし、都市空間に美術館が「個」としての存在感を持つためには、やはり常日頃から充実した作品群が見られるという点、そして人々との活発な交流が行われることが絶対不可欠であると私は考える。今後博物館実習を履修する機会があると思うが、上記の二点が如何に日本において達成できるかも考慮しながら臨んでいきたい。

こうして述べてきた三点以外にも、今回の滞在中様々な驚き、発見はあり、その度に自己の世界が広がるような感覚が得られた。しかし、こうした「驚き」というものが本質を捉えうるかどうかについては議論の余地があるように思う。サンテグジュペリは言う

「ある光景に興味を抱く間、我々は依然異邦人の観点からことを判断しているに過ぎない。本質的なものとは、それが人生に与える味わい、人生の意味であり、それはもう目を

見張らせるものでなく自然単純なものとしてしか現れようがないのである。(ルポルタージュ、ソヴィエト連邦)」

確かにそうかもしれない。二週間の間、私は全き異邦人であったのだから。だが、たとえそうであったとしても、「日本」という対象から一度離れることにより新たな側面は浮かび上がる。また否定なしに壁にぶつからざるを得ず、そうした過程に自己の成長を体験として獲得するのである。これが始まりであって、単なる良い思い出として残してもあまり意味はない。生かしかつ進まねばならないという欲求を私に抱かせるのだ。よって、こうした機会を得たことは自分にとって大きな財産であり、今事業に尽力して下さった数多くの方々には厚い謝意を述べたい。またこの文章の読者の中に参加を逡巡している人がいるのであれば、ぜひ挑戦してほしいと思う。きっと想像以上の経験がえられるであろう。